

NEWSLETTER No.51 TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ

THE SOCIETY FOR RESEARCH IN ASIATIC MUSIC

社団法人 東洋音楽学会 会報 第51号

発行(社)東洋音楽学会(事務所)〒110-0001 東京都台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号

TEL.03-3823-5173 FAX.03-3823-5174 E-mail LEN03210@nifty.ne.jp

目次

第51回大会レポート.....1	定例研究会発表募集.....7
会長就任のご挨拶.....5	定例研究会報告.....7
通常理事会・総会議決事項のお知らせ.....5	会員異動.....10
受贈図書・資料の処分について.....6	図書・資料等の受贈.....13
第52回大会のご案内.....6	新刊書籍.....13
第18回田辺賞アンケートのお願い.....6	新発売視聴覚資料.....14
会費納入のお願い.....7	編集後記.....14
定例研究会開催予定.....7	第31回通常総会議事録(抄)・添付書類.....15

第51回大会レポート

(2000年10月7-8日 於:金沢市文化ホール)

第1日 10月7日(土)

イベント「加賀宝生流謡曲小謡(羽衣・鶴亀・高砂)」(みなと保育園児)

第1日目は、開会に先立ちイベントとして、舞台一杯に並んだ保育園児たちの謡曲小謡からはじまった。精一杯大きな声を張り上げて謡う園児たちの姿からは、加賀宝生流が生まれ育った地ならではの、伝統文化を支える層の厚さを感じることができた。

公開講演会

1.「雪」のわらべ唄・白山麓から能登半島へ。(小林輝治)

2.「歌謡劇の伝承」(三隅治雄)

公開公演「尾口村東二口文弥人形浄瑠璃(酒呑童子)」

(東二口文弥人形浄瑠璃保存会)・「柏野じょんがら踊り」

(柏野じょんがら保存会)

歌謡学会会員の小林輝治氏の講演は、雪をめぐるわらべ唄の歌詞を通して、加賀と能登の風土や暮らしの違いと唄との関わりをとらえたものである。氏の長年にわたる調査研究をふまえて、土地の人々のことばなどが随所に取り込まれ、か

つての土地ごとの暮らしぶりを彷彿とさせるものであった。

能登にも加賀にも共通した風土的特徴として日本の最多雨地であり、冬季にはそれが重たいべたべた雪になる。しかし、石川県を一つと考えるとはいけない。能登半島の特色は土地がないことで、特に外浦の突端にいくにつれ断崖絶壁の海岸線が続き、座ると隠れてしまうような小さな田んぼでの農耕生活が営まれた。これは、天下の穀倉地といわれた加賀の平野部の暮らしとはまったく違う。一方、加賀でも海岸部にいくと雪はほとんど降らないが、白峰村などの白山麓の村々ではひどい時には7-8mの降雪があった。雪をうたったわらべ唄には、こうした風土の違いや土地ごとの暮らしの違いが如実に表れている。まず、雪に対する人々の受け止め方は、雪の少ない平野部と山間部では大きく異なっており、それがわらべ唄の歌詞にも表れている。雪の少ない平野部の穀倉地帯では雪は恐怖の対象ではなく、雪は春になって田に水を供給するものとして歓迎され、わらべ唄にもその喜びが歌われている。しかし、雪の多い山間部では雪をうたったわらべ唄が少ない。また、同じ能登でも口能登と奥能登では暮らしや信仰との関わり方に違いが見られ、それが類似したわらべ唄の歌詞の違いに表れている。たとえば、「ぼたぼた雪の」というわらべ唄では、口能登地方では「やっこ(乞食の方言)」と歌われる部分が、奥能登地方では「地藏さま」と歌われる。前者が生活の苦しさがあるまま歌詞やハヤシ言葉に見られるのに対して、後者では浄土真宗の教えに救いを求め、どんなに厳しい生活でも阿弥陀さまに守られているという安らぎが歌に表れている。現在では暮らしも大きく変わり雪対策も整って、かつてのような雪との密接な関わりはどこの土地にも見られなくなった。雪の

わらべ唄も歌われなくなり、歌が消えると同時に村の人々の絆や四季の移り変わりを喜ぶ気持ちが失われてきてしまったように感じると結ばれた。

「歌謡劇の伝承」と題された両学会会員の三隅治雄氏の講演はわが国の劇は語り物と歌い物という二種の歌謡ジャンルを有力な基盤として生まれ育ったものにとらえ、その展開の様相をひもとくという意図をもつものであった。まず、わが国において演劇が誕生する場として、祭りを中心とする4つの場が示された。神を迎えての祭祀で神がかりした者の託宣を祭祀者が聞いて問答をかわす場、祭りや氏族や宮廷の儀礼の宴において大勢の聞き手を前に弁舌をふるった語りを職とする者の語りの場、稲の耕作に先立つ季節に田に出て豊作の物まねを演じて豊作を祈る予祝儀礼の場、季節の折りに男女が集まって歌の掛け合いをしたり悪態をつきあったり、力や技を競いあったりするもの争いの場であり、これが演劇胎動の温床となったとした。そして、これらの場での神がかり、変身、物まね、掛け合い、競い技などの行為が劇誕生のもととなり、こうした身体行動が演劇に成長するにあたっては、祭りが適切な劇場の役割を果たしたとされた。また、祭りは神と人との交わりという日常生活ではあり得ないフィクションの世界であり、集まった人々はフィクションであることを心得た上で、それぞれがイマジネーションの世界に我が身をゆだねてそれらしい振る舞いを演じた。こうした祭りの形式の中からどんなドラマが生まれていったかについて、さまざまな歌謡研究の例を引きながら、多彩な対象について話が進められた。特に語りの伝承については、古代に活躍した語りのプロフェッショナルである語部の存在に注目し、『古事記』神代巻の、八千矛神が沼河比売に嬲問いする神語を例として、語部が持っていたと思われるパフォーマンス性豊かな演技力、そして語部自身が体験し目撃してそれを語っているかのような文体その会話の展開の巧みさ、劇的構成の緻密さなどについて、克明に検討された。そこに見られる歌謡劇への発展の要素との関連で、沖縄歌劇に見られる登場人物が歌を掛け合いながら、物語を進めていく展開方法や、既成の歌を物語にあてはめていく歌と物語の関係などへと話が進められていった。また、語り物の芸能として、浄瑠璃を得て人形が動いていく人形芝居に注目する必要があることにもふれられ、その後引き続き行われた公開公演への橋渡しがなされた。芸能の研究は、語りの脈からあるいは歌謡と歌の脈からさまざまに展開したものにそれぞれに注目する必要があると最後にまとめられた講演は、とてもこの短いレポートに報告しきれものではないほど濃密な内容を持ち、かつその史的展開へのダイナミックなとらえ方に大きな知的刺激を受けるものであった。

引き続き行われた公開公演では、人形劇として非常に古い

形を残している「一人遣い」の尾口村東二口文弥人形浄瑠璃と、口説の芸脈を持つ柏野じょんがら踊りが上演された。いずれも、公演に先立って専門家による詳細な解説が行われ、それによって芸能の内容はもとより伝承の状況についても知ることができた点が今後の公開公演の在り方として参考になった。公演はそれぞれの保存会の総力をあげたもので、短い時間ながらその真髄を見せていただくことができた。

#### 第17回田辺尚雄賞授賞式

懇親会・田辺尚雄賞受賞祝賀会

第17回田辺尚雄賞は「江戸時代の琴士物語」(『楽道』第618-698号)の著者岸辺成雄氏に贈られた。授賞式は公開公演に引き続いて行われ、まず同賞選考委員長である福島和夫氏から選考経過ならびに授賞理由の報告があった。とくに、異例ともいえる連載論文への授賞について説明がなされ、そのテーマの斬新さ、長年にわたる緻密な考証にもとづいた新鮮な考察などにより、選考委員会の全会一致(委任状1名)で授賞が決まったことが報告された。ついで会長から受賞者に賞状が授与され、その後、岸辺成雄氏から受賞にあたっての挨拶が述べられた。

懇親会・田辺尚雄賞受賞祝賀会は金沢ニューグランドホテル金扇の間で、両学会から多数の参加者を集めて盛大に開催された。NEOKOTOグループの演奏、金石町青年団の田辺尚雄賞祝賀兼両学会隆盛祈念の悪魔祓いなど、開催地からの多くの協力も得て、合同大会ならではの華やかな会となった。

(加藤富美子)

第2日 10月8日(日)

#### 研究発表1(日本歌謡学会1)

「谷崎潤一郎『蓼喰ふ虫』における

地歌詞章の引用に関する考察」(福田寿子)

日本歌謡学会研究発表1は、福田寿子氏による「谷崎潤一郎『蓼喰ふ虫』における地歌引用に関する考察」であった。

福田氏は、上方文化の代表的な芸能である地歌の詞章や曲名が、谷崎作品の随所に登場することに注目、「蓼喰ふ虫」という作品における地歌詞章の引用例を示された。福田氏が取り上げた『蓼喰ふ虫』においても、地歌4作品の曲名および詞章が見られるが、それらは登場人物の心理描写の伏線として引用され、地歌詞章の内容を考察することによって小説をより深く理解することが出来ると主張された。

しかし、引用された歌謡が近代文学に与えた影響や、その物語中における歌謡の機能について、また谷崎自身と地歌との関係に関する考察が、この一作品を取り上げただけでは不

十分であると指摘する声も聞かれた。今後、他の谷崎作品や谷崎自身の音楽面にも触れ、谷崎文学と歌謡との関係を解き明かす研究へと広がっていくことが望まれる。

(井口はる菜)

#### 研究発表 1(東洋音楽学会 1)

「観世流『明和改正謡本』の記譜法」(丹羽幸江)

はじめに司会の小林貢氏より、丹羽氏の発表が、修士論文における明治以降の謡の変化の研究に続くもので、執筆予定の博士論文のテーマである江戸期の観世流の記譜法の研究の一環であることが紹介された。第十五代観世大夫元章による謡本の大改訂として知られる『明和改正謡本』はあまりに大幅かつ煩雑な改訂ゆえに不評ですぐに廃止されたが、丹羽氏は明治の『観世流改訂謡本』の記譜法は、明和本で確立しかかった記譜法の原則を復活したものであるという立場で、明和本の記譜法の最大の特徴である宗家の入れた「直シ」に着目し、明和本の「直シ」は、従来のものの集大成にすぎなかったのが最終巻近くには符号の統一化がある程度整うことを検証し、明和本の記譜法が以後の合理的に統一された記譜の土台にある、と指摘した。またその統一化の過程の検討が、当時の謡の音階の変遷や旋律型の認識を知る手がかりにもなると述べた。記譜法の変遷のなかに過去の謡の実像を解明しようとする大変興味深い研究であった。ただ「元章は旋律型の表示方法を統一する必要を感じなかった」という指摘と、明和の改訂においては記譜法の集大成が次第に統一化へと向かったという指摘の二点がどのような関係にあるのかが、筆者には充分理解できずに終わった。発表後、横道萬理雄氏から、発表内容が理解されるよう記譜例だけでなく旋律型の実像も提示するなどの工夫が求められた。また小林貢氏から、江戸期の謡を明らかにするにあたっては他流の記譜法についても研究が期待される、と述べられた。(山本百合子)

#### 合同セッション

「伝承の(今)を考える」(コーディネーター 飯島一彦、パネリスト:長野隆之、宮崎隆、狩俣恵一、加藤富美子、

薦田治子、谷垣内和子)

本大会のメインとなる合同セッションのパネリストは、日本歌謡学会、男性 3 名(発言順に A,B,C とする)、本学会、女性 3 名(D,E,F)であった。司会者の 12 分もかけた趣旨説明とパネリスト紹介の後、A より、伝承とそれに関わる一般的概念の報告、B と C の現状報告があり、C を受ける形で、D は、小浜島における個人伝承と継承に関わる実例とその展開を報告。E は、平曲から、伝承における変化の要因をあげ、F は、伝承者を取り巻く諸

現象の状況などの変容をデータで示した。これらの各報告を通して、「伝承は変化するが、不変な要素もありうる」と、司会者は、まとめた。しかし、今という観点が、抜け落ちてしまい、論議の鍵となるべき、D の報告にあった島を越えて拡大した伝承の展開については、議論の進展もなく終わった。これは、司会者の今の意識の欠落に起因するのではないか。このような催しの成否は、司会者の腕にあるということを再確認させた。同様なことは、パネリストの一部にもいえる。定められた時間内で自論を明確に述べる技術は、研究者に不可欠である。B、C の報告や今更伝承は変化するというようなレベルをフロアーは、期待していなかったはずである。(樋口 昭)

#### 研究発表 2(日本歌謡学会 2)

「法会における教化

—仁和寺蔵『五宮御灌頂記』紙背の新出教化を中心に—

(小島裕子)

小島裕子氏はこれまで既に、仏教歌謡研究の分野に多くの論考がある。とくに「梁塵秘抄」に現れた「結縁の暁」や「三十二相」や、金澤文庫資料中の妙音院流の「三十二相」に関する考察をはじめ、東大寺二月堂修二会や天台宗に伝わる法華懺法と法文歌の関連を論じた発表があり、いずれも法会の実際を見据えながらの考察という一貫した姿勢が見て取れる。今回の発表もその延長線上にあると言え、仏教儀式声明としても歌謡研究の上からも重要な位置にある「教化」に着目し、新出の仁和寺資料についての詳細な調査と考究が行われた。

「教化」は佐藤道子氏の指摘のように、梵語・漢語の仏教儀式の堅苦しさを和語によって和らげるという課題が課せられたであろうが、声明として果たしてどこまで有効であったかについては疑問が残る。詩句として仏教歌謡史には画期的であった「教化」ではあるが、声明史にあっては、梵漢声明と同じ旋律法によっており、詩形も堅苦しさが見られるのであって、次期の日本語声明への過渡期的展開と見るべきではなからうか。歌謡学会外からの多言を許されたい。

(岩田宗一)

#### 研究発表 2(東洋音楽学会 2)

「仏教唱歌の創成

—明治 22 年出版『佛教唱歌集 第一』を中心に—

(地土井志保)

地土井志保氏は「仏教唱歌の創成—明治 22 年出版『佛教唱歌集 第一』を中心に—」という題で、近代仏教音楽の一ジャンルの仏教唱歌を取り上げられた。問題は維新、廃仏後の仏教界から小学唱歌集、雅楽、讃美歌などの影響を受けて仏教唱歌

が明治22年に誕生し、この仏教唱歌は明治40年頃まで続けられたが、その後日曜学校の普及と共に讃仏歌に変わった、ということで、なかでも明治22年6月に出版された岩井一水の『仏教唱歌集 第一』は初めての仏教唱歌集としては、五線譜による作曲が洋楽の立場から意義ある音楽であったという発表であった。ところで資料<sup>2)</sup>の 岩井から の羽塚は重要でありながら当時の仏教史とあわせて仏教唱歌の誕生が説明されなかった。この作曲をした岩井は浄土宗の僧侶であるが、仏教各宗の仏教唱歌ではどうであったかも考察して欲しかった。また近代仏教史における仏教唱歌とは何か、そして仏教唱歌集の歌詞の内容にも言及すべきと考える。

(山口淳有)

#### 研究発表3(日本歌謡学会3)

「朗詠曲『徳是北辰』の唱法」(青柳隆志)

青柳氏の発表の趣意は、「朗詠常用曲」中の代表曲である「徳是北辰」の唱法を実演史に即して再確認することにあつた。そのことについて「一、朗詠曲「徳是北辰」の周辺(出典・初見・朗詠曲目・朗詠伝授・その他の事例) 二、朗詠曲「徳是北辰」の唱法(反度による変化・句構成構成の問題・中世の「徳是」実演記録「徳是」以外の曲の場合・譜本による検証・江戸期譜本における「徳是」の実例)」という発表資料順に従って検証が行われた。結論は現行の全朗詠曲は総て三句構成であるが、本来漢詩文は対句仕立てであり四句ではないか。そして「徳是北辰」の唱法の二句構成は本来四句であるべきで、それは鎌倉末期・南北朝期までは逆れるというものであつた。それ以前はどうか。氏は「嘉辰令月」が唯一の漢文直読体の朗詠曲であるというが、それは今日的な見方である。国風文化に移行する以前には漢文直読体の朗詠が行われていた時期があつたはずである。一考を。

発表後、飯島一彦氏から方法というよりも形式の問題ではないか等の、小野恭靖氏より『宴曲譜』の譜形について現行の形かどうかの質問がなされた。

(磯水絵)

#### 研究発表3(東洋音楽学会3)

「讃仏歌の創成-明治40年出版『讃仏歌』の研究-

(ホアキン・M・ベニテズ)

3の発表は、ホアキン・M・ベニテズ氏の「讃仏歌の創成 明治40年出版『讃仏歌』の研究」で、明治38年に仏教界で初めて日曜学校が開校された。日曜学校で必要な讃仏歌の一として明治40年に京都求道会が出版した『讃仏歌』は、審美会の毛利兵造が作曲と選曲をしているが全20曲中10曲が何とプロテスタントの讃美歌の借用ではないか、その上に歌詞も「あゝみ仏」では慈悲を愛としているのは仏教歌ではない、明治の

西欧化にともなう文化混交でキリスト教概念の仏教への転用であった。以降の「サンブツ歌」では、もはやキリスト教からの借用もないし、模倣もない。所でこの毛利なる人物、審美会、京都求道会とは何かということである。これは明治の本願寺史、龍谷大学の動き、明治京都音楽史をさらに考究すべきであろう。近代仏教音楽の研究は1965年から山口、飛鳥により論考されているが、このようにキリスト教側からの論文をさらに必要とするものである。

(山口淳有)

#### 研究発表4(日本歌謡学会4)

「記紀歌謡と叙事歌

-赤猪子の歌謡における「転用」論の再検討」(居駒永幸)

土橋寛氏の「独立歌謡論」は、それまで記紀の所伝と分かち難く結び付けて解釈されてきた記紀歌謡をテキストの拘束から解放し、一つの歌謡として自由に解釈する途を拓いた。その後の古代歌謡研究のめざましい発展も、それによってはじめて可能になったといつてよい。居駒氏の発表は、そうした土橋以後の古代歌謡研究の成果の上立って記紀所載の歌謡群の歌謡の本質と物語との関わりを問い直そうとするものである。

氏は、記92-95番歌の雄略と引用部赤猪子との伝承にまつわる四首の歌謡を取り上げ、土橋氏の歌謡転用説や品田悦一氏の改作説を退けて、「物語(叙事)」は、歌そのものの表現の中に内在しているのだと主張する。たとえば、95番歌の「口下紅の」の歌について、氏は、記の記述に先行する天皇と若日下部王との成婚と立后という「叙事」を内蔵するものとして、「その叙事性は『日下』『花蓮』『身の盛り人』の表現」に寓意として内在し、その地名や景物から呼び起こされてくる」と述べている。歌を物語の付属物としてではなく、歌そのものの中に叙事への契機を見、むしろ歌の表現こそが物語を紡ぎ出すのだとする氏の主張は、古代歌謡研究の新しい展開を予感させる示唆に富んでいるが、一方、その論の核となるべき「叙事」の概念がほとんど「寓意」と同置されるなど、あまりにも広く茫洋としているため論理の骨格が明瞭に見えてこない印象を受けた。会場からの質問も、その「叙事」の内容や範囲に関わるものであつた。

(永池健二)

#### 研究発表4(東洋音楽学会4a)

「妙音院流の懺法に関する一考察」(近藤静乃)

発表は、その信憑性について既に疑義が指摘されていた『聲明聲決書』上の妙音院流関連の記載事項の問題点の指摘から始まり、妙音院流の懺法に関わる資料の系統とその記述内容を分析し、妙音院流の懺法の固有性を検証するもので

あった。フロアからは懺法中の「六根段」に関する資料の音楽内容、天台大原流の懺法の律呂との関わり、大原流に対する師長の影響力、妙音院流の声明の理論と実態などについて質問や意見が出され、妙音院流としての音楽面での独自性が論点となった。この点について近藤氏は結論で妙音院流の伝として一括することの無理を認めつつ、如法経会との関わり及び「合殺」の存在を独自性とするが、儀礼の次第の問題に止まり、音楽面までには至っていない。今後、大原流等関連声明流派の博士の比較、妙音院流音楽理論の位置づけの検討など、各資料の音楽面に大きく踏み込むことにより、氏の研究が一層深まることと思われ、大いに期待される。(澤田篤子)

#### 研究発表 4 (東洋音楽学会 4b)

##### 「大坂宮地芝居興業と演奏者

-文化年間から慶応年間まで-(武内恵美子)

武内恵美子氏の「大坂宮地芝居興行と演奏者 - 文化年間から慶応年間まで -」は、これまでほとんどなされていなかった近世大坂の芝居にまつわる状況及び演奏者に関する研究という、新しい分野を開拓した研究発表であった。武内氏は宮地芝居が興行された近世後期大坂の芸能・芸能者の状況を説明することを目的として、その興行史とそこに出演した演奏者を記す役割番付をもとに、御霊社・稻荷社・座摩社・天満宮について、それぞれ確認できた番付の状況と座元の系統を示された。また、演奏者別出演状況も、出演回数が多い順に整理され、浄瑠璃と三絃奏者との組み合わせについても触れられた。

このように番付から読み取れる情報をまとめられた成果は大きいと思われるが、あくまでも番付に拠るもので、番付がないから芝居も行われなかったと断言できない点をどう扱うのか、また今後の研究が楽しみな分野であるだけに、更なる言及を望む声が会場から寄せられた。(井口はる菜)

#### 会長就任のご挨拶

二年間の役員休止期間の後また理事に選出され、今期は編集委員会のお手伝いをしようと心づもりをしていたところ、またまた会長にされてしまいました。正直に言って、いささか困惑しています。しかし、民主的な手続きで選ばれた以上、二年の間、本学会の為に奉仕すべきだと決意を新たにしたいところです。

昨年度の事業として、本学会がホスト役をつとめた国際伝統音楽学会 (ICTM) の第 35 回世界音楽大会は会員各位のご協力を得て、成功裏に終了することができました。予期した以上に大勢の海外からの研究者が来日して学術的な交流がで

きたことと、本学会の存在が広く世界に知られたことは、本事業の大きな成果であったと思われまます。

しかし、これは二十世紀の締め括りであって、本学会は二十一世紀に向けて脱皮していかなければなりません。学会諸活動の活性化、機関誌の内容的充実、制度の改革、情報公開、内外の学术交流など、本学会にはいろいろな問題が山積していますが、これから二年間、新理事諸氏とともに会長の責務を全うすべく尽力するつもりであります。会員各位のご支援とご協力も併せてお願いして、会長就任のご挨拶にかえたいと存じます。(柘植元一)

#### 通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2000 年 10 月 7 日 (土) に金沢ニューグランドホテルにて第 62 回通常理事会が、翌 8 日 (日) に金沢市文化ホールにて第 31 回通常総会および臨時理事会が開催されました。

以下に、これらの会議の議決事項のうち、特記すべきものをご紹介します。なお、通常総会の議決に関しては、後掲の総会議事録ならびに添付資料をご参照ください。

- (1) 学会の制度改革については、新たに制度委員を委嘱して、引き続き検討することになりました。
- (2) 新年度の役員、各種委員会の委員が、以下の通り決定いたしました。

##### 理事:

(会長) 柘植元一 (副会長、関西支部長) 櫻井哲男  
(沖縄支部長) 蒲生美津子  
(総務) 植村幸生、加藤富美子、薦田治子、野川美穂子  
(経理) 塚原康子、茂手木潔子  
(機関誌) 柘植元一、尾高暁子、櫻井哲男  
(例会) 塚田健一、永原恵三  
(関西支部総務、経理) 月溪恒子  
(関西支部例会、広報) 寺田吉孝  
(沖縄支部) 久万田晋

##### 監事: 徳丸吉彦、山口修

##### 顧問: 片岡義道

参与: 小野功龍、酒井諒、谷村晃、谷本一之、中小路駿逸、本田安次、馬淵卯三郎

##### 参事:

##### [本部]

(総務) 太田暁子、小塩さとみ、北岡朱実、島添貴美子、  
竹内有一、福田千絵、前島美保、前原恵美、  
増野亜子、松村智郁子、三上康子  
(例会) 近藤静乃、清水淑子、滝沢友子、土田牧子、  
丹羽幸江、森田都紀

(機関誌)鈴木純子、平間充子

[関西支部]

(総務)薛羅軍

(例会、広報)上野正章、北見真智子、寺内直子、

福岡まどか、藤田隆則、渡辺浩子

[沖縄支部]仲村由樹、高橋美樹

地区委員:

(東北)桂博章 笹森建英

(関越)荻美津夫、星旭、増本伎共子

(中部)久野壽彦、高橋昭弘、安田文吉

(近畿)網干毅、泉健、伊東信宏、岩田宗一、志村哲、

中川真、山田智恵子

(中国)片桐功、原田宏司、山田陽一

(九州)松永建、松原武実、宮崎まゆみ

(沖縄)大塚拜子、金城厚、杉本信夫、比嘉悦子

会報編集委員会:

加藤富美子、野川美穂子、太田暁子、小塩さとみ、

北岡朱実、竹内有一、福田千絵、前島美保、前原恵美、

増野亜子、松村智郁子、三上康子

機関誌編集委員会:

柘植元一、櫻井哲男、尾高暁子、高桑いづみ、平間充子、

鈴木純子

情報委員会:

久万田晋、小日向英俊、田井竜一、中村美奈子、

T.M. ホフマン

## 受贈図書・資料の処分について

学会員および関係機関よりご寄贈頂きました図書・資料につきましては、従来、会報に「図書・資料等の受贈」として掲載し、学会員の研究活動に活用できるよう、事務所に保管して参りました。しかし、残念ながら、現在の手狭な事務所には十分な所蔵スペースがなく、また会員に活用して頂くための十分な労力も提供できない状況です。そのため、昨年 10 月に開催されました第 62 回通常理事会において、やむなく次の決定がなされました。定期刊行物については、ご寄贈頂いて 2 年経過した時点で廃棄させていただきます。書籍等につきましては、やはり 2 年経過した時点で、古書店にて処分させていただきます。なお、従来通り、会報の誌面におけるご寄贈のご報告はいたします。学会の現状をご理解頂き、何とぞご了承下さい。

## 第 52 回大会のご案内

東洋音楽学会第 52 回大会は、2001 年 11 月 24 日(土)、25 日(日)の両日、沖縄県立芸術大学(那覇市首里)にて開催いた

します。

今大会では個人発表に加え、いくつかのテーマについてのラウンドテーブル(ミニ・シンポジウム)を設定したいと思っています。研究発表およびラウンドテーブルの募集要領は、次回の会報に掲載する予定です。

なお、中日音楽比較研究国際学術会議(東洋音楽学会協賛)が大会前日(11 月 23 日)に開かれますので、本大会と併せての参加が可能です。

問い合わせ先:東洋音楽学会沖縄支部

.098-882-5015 E-mail:s-kumada@okigei.ac.jp

## 第 18 回田辺賞アンケートのお願い

第 18 回田辺尚雄賞は下記の要領で選考・授与されます。その選考対象となる会員の業績について、皆様からの情報を募集いたします。会員各位のご協力をお願いいたします。

(選考委員 :大貫紀子、岡崎淑子、柘植元一、龍村あや子、

安田文吉(委員長)以上 5 名。

(対象期間 : 2000 年 1 月 1 日~12 月 31 日。

(アンケート締切り : 2001 年 2 月 10 日必着。

(アンケート記入事項 :著者名、著書名、発行年月日、発行所名。なお、論文の場合は、以上のほか、掲載誌名、巻次、編集者名、論文頁数を記入してください。

(アンケート送り先 :

〒 110-0001

東京都台東区谷中 5-9-25 第 2 八光ハウス 201 号室

(社)東洋音楽学会第 18 回田辺尚雄賞選考委員会

田辺尚雄賞実施要綱

1.対象 : 毎年 1 月 1 日より 12 月 31 日までの間に発表刊行された著書、論文等。

2.資格 : 東洋音楽学会会員および会員が過半数を占めるグループ。

3.分野 : 日本、東洋の音楽を中心とする。

4.選考 : 理事会が委嘱する 5 名の委員により選考する。

5.賞 : 賞状および 10 万円。

6.発表 : 全会員に文書をもって告知する。

## 会費納入のお願い

2000 年度(2000 年 9 月 1 日~2001 年 8 月 31 日)までの学会費を未納の方には、請求書と振替用紙を同封いたしました(会費

請求書と振替用紙が同封されていない方は、納入済みです。  
請求書で未納金額をお確かめのうえ、早急に払い込みください。  
会費未納の場合、その年度の機関誌はお送りできません。

本状と行き違いに納入がありました場合は、どうかご容赦  
ください。

## 定例研究会開催予定

(本部)

### 第436回定例研究会

2001年2月10日(土) 午後2時00分・4時30分

お茶の水女子大学共通講義棟2号館102

研究発表

「春日大社にて発見された雅楽器」

秋田真吾(春日大社宝物殿学芸員)

シンポジウム

「楽器史への試み・春日大社の和琴をめぐる」

パネリスト(予定)・秋田真吾、高桑いずみ、

高橋美都、野川美穂子

### 第437回定例研究会

2001年3月3日(土) 午後2時00分・4時30分

お茶の水女子大学文教育学部2号館110

内容 卒業論文・修士論文発表

### 第438回定例研究会

2001年4月7日(土) 午後2時00分・4時30分

東京芸術大学音楽学部 5・301教室

内容 卒業論文・修士論文発表

(関西支部)

### 第202回定例研究会

2001年2月17日(土) 午後2時00分・5時00分

国立民族学博物館 第一演習室(4階)

研究発表1「能楽における位をめぐって(仮題)」

北見真智子(神戸大院生)

研究発表2 発表者・演題未定

(沖縄支部)

### 沖縄支部第31回定例研究会

2001年2月中(予定)

学

沖縄県立芸術大

内容未定

## 定例研究会発表募集

下記の定例研究会における研究発表(口頭)を募集します。

発表希望者は、発表種別(研究発表、報告等)、発表題目、要旨  
(800字以内)、発表希望日、氏名、所属機関、職名、連絡先(住  
所、電話、FAX、E-mail等)を明記の上、学会事務所に申し込  
んで下さい。

(本部)

第440回 2001年6月2日(土)午後2時より

東京芸術大学音楽学部

第441回 2001年7月7日(土)午後2時より

上野学園日本音楽資料室

第442回 2001年9月1日(土)午後2時より

上野学園日本音楽資料室

## 定例研究会報告

本部

第433回定例研究会(2000年7月1日)

上野学園日本音楽資料室

研究発表(3件)

1.平曲と薩摩琵琶における和歌の歌唱法の影響

須田誠舟(琵琶演奏家)

(発表要旨)

平曲、薩摩琵琶の歌詞の中に現れる和歌は、それぞれ決  
まった曲節で歌われることが多い。これはなぜか、何の影響  
か、また後の芸能にどんな影響を及ぼしたかということを解  
明できないか、そしてそれを通して昔の日本人の音楽に対す  
る姿勢、音楽をどう捉えていたかを探ってみようとしたのが、  
本研究のテーマである。

荻野検校の手によって書き表された平曲譜本(平家正節)の  
うち、いわゆる青洲文庫本には101の和歌(短歌)が、その詞章  
の中に詠み込まれており、それらの和歌は、それぞれ上歌、下  
歌、曲歌という曲節で歌われるように、その曲節付けがなさ  
れている。和歌については、歌詞の内容等に関係なくうたい  
が一定していると言えるが、先行音楽である今様、漢詩朗詠  
等はさまざまな曲節で歌われている。館山漸之進著「平家音  
楽史」には、平曲のはじまりに大きく関わった慈鎮和尚は和歌  
披講の達人であったと記されていることなどから考え、平曲  
における和歌は、うたい方の一定している披講の影響を強く  
受けたと推定される。披講は、冷泉家、二条家等の家に伝わる  
音楽となったが、その歴史を遡ると家族や親しい人々が寄り  
集って、合唱した家庭音楽として広く親しまれ、普及していた  
可能性があり、そのことが和歌披講の方が平曲の和歌に比較  
して、一曲の和歌の演奏時間が長くなっていることと関係し  
ていると考えられる。

薩摩琵琶の始祖、島津日新斎の孫にあたる戦国武将として

名高い島津義弘の作詞した薩摩琵琶歌「小敦盛」の歌詞は、多くの武家に親しまれた幸若舞曲の「敦盛」に加筆して作詞したことが歴然としており、両者に共通の和歌が2首読み込まれている。薩摩の武士の精神修養の一環として、自分自身に向かって演奏するという色彩が強いこともあって、披講や平曲に比して、和歌の演奏時間はさらに短くなっていることが指摘できる。

(コメント・質疑応答)

発表者の須田誠舟氏は、薩摩琵琶(正派)の奏者で、近年金田一春彦氏の研究に基づいた平曲の復元演奏も行っている。演奏者の視点は、多くの場合研究者にも示唆に富む。例えば、平曲を演奏するのに、なぜ薩摩琵琶の歌唱法を用いるか、といった発表は、須田氏でなければ出来ないであろう。ただ、今回の発表では、演奏のデモンストレーションはあったものの、演奏者という立場からの発言はほとんど見られなかった。研究者としての学会発表を目指すのなら、「歌唱法」と「旋律」を混同しないよう、初歩的な音楽用語の意味を学習してからのほうがよいだろうし、先行研究についても1919年以降のものも調べておかれたほうがよいであろう。演奏時間をとりあげ、現行伝承のデータを単純に過去に遡らせて、各種目の形成事情と結びつけた点で、朗詠研究家の青柳氏から手順に問題ありとの指摘があった。次回は演奏者としての発表を期待したい。(薦田治子)

研究発表

2.アイヌの「神謡」の旋律について

-「クモの神の自叙」の録音資料を例に-  
甲地利恵(北海道立アイヌ民族文化研究センター)

(発表要旨)

アイヌの伝統的な歌の歌い方を探る試みの一つとして、今回は「神謡」というジャンルの一例を取り上げ、先行研究に照らしながら論点を検討した。本発表では、既に甲地が「クモの神の自叙」(以下「クモの…」と略)の音楽について「旋律構造とリズム配分を中心に」(2000)で論じた内容の他、新たに、リズム配分・音節数・語のアクセントと旋律との関係について言及する。

アイヌ語沙流方言話者による「クモの…」ではサケへと呼ばれるリフレイン(1)と物語の部分(2)とが交互に歌い語られる(1212…)。1と2にはそれぞれ数種類の音型が見出され、その組合せで旋律が構成される。

1+2を仮に4拍子にとると、最終拍には2末の2音節がほぼ一定のリズムで配分される。これは近藤鏡二郎「アイヌのユーカラ」沙流地方の伝承を主として(1961)での指摘と共通す

る。

アイヌ語の韻文は5音節が主であると言われる。2が5音節の行に注目すると2種類のリズムパターンが見られる。これは2冒頭の2音節でアクセントのある方を3拍目の頭(音が上行した所)に配分するため生じた違いと思われる。音の高低の対応には奥田統己「カムイユカラ」の詞句のアクセントとメロディーの関係(1991)での指摘と共通するものがある。

4音節を5音節に整える虚辞は「クモの…」の4音節行では使用されていない。これは、たまたま4音節行冒頭のアクセントが全て、虚辞を用いなくても5音節の場合での原則と同じ様に歌える位置にあるためと推測する。

6音節以上の行は数が少ないが、傾向として同一音高上で展開・終止するものが多い。「クモの…」は決して神謡の典型的な例として取り上げたわけではない。しかしそこには神謡ひいてはアイヌ音楽全般の研究において着眼すべき問題が見出される。今後の課題は他の神謡やジャンルにおいても同様の指摘ができるかどうか検証していくことである。

(コメント・質疑応答)

酒井正子、千葉伸彦、竹内道敬氏より以下の質疑・コメントがあった。

(問)「神謡」の旋律について、歌い手の意識は次の点についてどのようになっているのか。リズム配分の特徴について、歌い手はそれを認識していないながらも、目安にはしているのではないのか。また歌をメロディーの音高と捉えているのか。あるいは言葉のアクセントと捉えているのか。

(答)具体的に歌い手に確認はとっていないが、経験、積み重ねがベースとなっている。また言葉の抑揚に忠実に歌っていると考えて良いと思う。

(問)サケへ1、2と分けているが、それぞれに似たような音のパターンがある。何故そのように整理しているのか。

(答)アイヌ音楽に日本音楽のような核音があるのか検討中。歌い手の年齢により歌い方も異なるため。

(問)「ノオ」の「ノ」を拍の頭と捉えているが、「オ」にする事も可能ではないか。

(答)仮に4拍と捉えた場合で、演唱者が一拍目に「ノ」をとっているかは不明。「オ」にすれば新たな分析結果も可能。

(問)口承伝承とは、口移して完全に伝わっていくこととして捉えるべき。

(答)アイヌ語に可変性のある言葉があるので、「完全」とは言い難いと思った。

以上、「クモの神の自叙」を綿密に分析した研究発表であった。アイヌの伝統的な歌がどのような旋律にのせられて歌われるのか、他の曲との比較など今後の研究成果が期待される

ものと思われる。  
子)

(福岡享

示唆した発表であった。

発表に際して提示された資料は、新たに発見された資料の詞章冒頭部分(初!才)および桑岡沖太夫と記された奥付、(傾城音羽瀧 あわ嶋の段)、本屋安兵

研究発表

3.新内「明烏」成立考

竹内道敬(放送大学)

衛板、墨屋吉兵衛

(発表要旨)

新内節の名作「明烏」が鶴賀若狭掾作ではないのでないかと疑問を投げかけたのは、宮地敦子『新内明烏考』(昭和59年、明治書院)である。それはさておき、宮園節「夕霧由縁の月見」との類似点と影響を考えて、それなりの結論はまとまっていたのだが、最近になって新資料を入手して、疑問が大きくなった。

新資料は桑岡沖太夫正本『けいせいこんたんの枕』である。とくにその前半は「明烏」と同文で、主要人物は傾城青柳とろせい、江戸吉原の廓内の遊女の描写に詳しい。七行八丁本で、内題下に「作者神崎助丸」とあり、裏表紙に「桑岡沖太夫一可述」とある。版元は「芝口紺屋町加賀屋源七」。この沖太夫正本に「傾城音羽瀧」があり、それには奥書に「延享二年弥生」とあり、同じく作者は神崎助丸である。また版元についていえばもう一点裏表紙一枚のみが残されているが、これも延享二年頃のもので、加賀屋源七について知るところがない。

さて豊島国太夫には『男作出世の員哥』という正本が残されている。しかしこの豊島国太夫についても、ほとんど知るところがない。弟子について調べてみると、国太夫はどうも延享以前の人らしい。宮古路豊後掾が死んだのは元文五年で、その後その弟子たちが分派するのだが、常磐津が独立したのが延享四年である。とするとこの国太夫はその間に存在したとしか考えられない。桑岡沖太夫とは何者なのか。一可とあるのは都一中と関係があるのか。また豊島国太夫とその弟子と推定される豊美繁太夫との関係、鶴賀若狭掾との関係はどうか。今までは豊島国太夫の正本『あけ烏』を無視してきたが、「傾城音羽瀧」を含めて鶴賀若狭掾作品としていいのかどうか、宮古路豊後掾没直後の宮古路節の世界について、考え直すべき時がきたようである。

(コメント)

この発表は、竹内氏が新しく入手した資料『けいせいこんたんの枕』に登場した桑岡沖太夫なる人物名から宮古路豊後掾没後当時の豊後系浄瑠璃界の実態に光を当てる試みの発表であった。その理由として、新資料の前半の詞章や内容と、新内(明烏夢泡雪)の詞章とが一致する点を指摘し、ここから(明烏)成立の背景とその作者について、従来鶴賀若狭掾とされた説に疑問を投げかけ、新たな作者の可能性もあるとことを

衛板、和久屋治兵衛板、清水次兵衛板の(明烏)の正本、豊嶋国太夫の名が見られる(あけ烏)『男作出世の員哥』などの諸資料、および宮園節(夕霧由縁の月見)と新内節(明烏夢泡雪)の詞章の一部を比較したもの、繁太夫、宮古路敦賀太夫、鶴賀若狭掾に焦点を当てた享保16年(1731)から宝暦6年(1756)年までの関連年表である。発表において、これらの資料に記されている、桑岡沖太夫、神崎助丸、加賀屋源七、豊嶋国太夫などの人名が、どのような人物であったか、また、彼は都一中や鶴賀若狭掾とどのようなかかわりがあったのかという疑問が投げかけられ、同時代のミステリアスな人物交流に光を当てることを目論んだ。

これから継続する実証的研究の成果により、日本音楽史の空白の部分が埋まるであろうことが期待される。

(茂手木潔子)

第434回定例研究会(2000年11月4日)

東京芸術大学音楽学部5-301教室

研究発表(2件)

1.芸術伝承と教育制度

-ジャワ島・チルボンの仮面舞踊手たち-

福岡まどか(国立民族学博物館非常勤研究員)

(発表要旨)

本発表は、インドネシア・西ジャワ州・チルボン県の仮面舞踊を対象として、村落社会における舞踊の伝承プロセスと芸術教育機関における伝承プロセスとの相違を考察するものである。特に、今回は、芸術教育機関における芸術教育のシステムについて詳しく検討した。

発表においては、問題設定と背景について述べたのち、国立芸術大学バンドゥン校の舞踊専攻科のカリキュラムと、教育の特色について検討した。

多種目の舞踊を段階的に、実技と理論の両面から学んでいく教育方法と、カセットテープを用いた教授法や動きを言語化して分析していくプロセスについて考察した。また実際の作品の分析をもとに創作の試みを重要視する教育の中で、舞台上演に適した作品のあり方についても検討した。

その結果、芸術教育機関においては、自己の創造性を享受

し評価する観客の存在を想定した舞台芸術作品を創るために芸術家たちが自分の技と知識を組み替えていく必要があることを指摘した。

最後に今後の研究の指針として、模倣を繰り返し上演を実践することによって芸を身につけていく従来の教授法と、分析的・指示的な教育方法との相違を検討することの意義を指摘した。

#### 研究発表

##### 2.口唱歌比較論-日本からウガンダまで-

デイヴィッド・ヒューズ(ロンドン大学 SOAS)

##### (発表要旨)

日本の伝統的な器楽の伝承に使われる「口唱歌」が西洋音楽のソルフェージュと異なる点は、前者の「自然性」にある。つまり、口唱歌に用いられる子音と母音は恣意的なものではなく、直接・間接にそれが伝承する音楽の諸要素(メロディー、リズムなど)を反映している。とくに母音に関しては、音韻学という「固有ピッチ」Intrinsic Pitch (IP)、つまり、口腔内の容積によって形成される倍音の音高が重要な役割を果たす。どの言語にあっても、/i/ /e/ /a/ /o/ /u/の順で IP が低くなる。この現象は意識されることは少ないが、人間はこれを潜在的に記憶していると考えられる。口笛、ささやき、救急車のピーポー、ホケキョなどの鳥のさえずり等を通じて、人間は IP 現象に日常的に接しているからである。

日本や韓国の口唱歌では、IP を利用してメロディーの音高変化を母音で表す。たとえば、龍笛や箏の口唱歌では、タロ、ロルなどはメロディーの下降を、ルロ、レリなどは上行を表す。龍笛の口唱歌では音高変化の98%が IP 順に従っており、能管も同様の高い比率で両者の対応関係を示している。また口三味線の場合にも、IP を表す傾向が強い。

IP 現象は世界のさまざまな口唱歌に見られるが、その具体的な使われ方は文化によって異なっている。たとえば、西ジャワの口唱歌では、メロディーではなくガムラン全体の相対的な音高変化を /i/ /e/ /a/ /o/ /u/の順で表すし、スコットランドのバグパイプの口唱歌では、音階中のそれぞれ固定したピッチを IP に従って表す。

このような口唱歌の一貫した傾向に不規則性をもたらすのは、「固有持続」Intrinsic Duration(ID)と「固有強度」Intrinsic Intensity (II)である。ほとんどの言語では、平均持続と平均音量は/i/と/u/が/e/と/o/より小さく、/a/が一番大きい。つまり、ID と II の順が/i, u/ /e, o/ /a/なのである。その結果、装飾音や音量の小さな音は/i/や/u/で表され、比較的音量の大きな音(三味線の「シャン」や音階中の核音など)は/a/で表される傾向が強い。

##### (例会の記録)

福岡氏の発表は、自身が直接に言及することはなかったが、文化人類学において今日盛んに行われている「ポストコロニアル研究」の一部をなすものといっていい。発表後の質問(木村、ヒューズ、塚田、増野)も、それにふさわしく「伝統の変容」に関わるさまざまな問題、すなわち、新しい創作に対する一般聴衆の受容の状況、国民国家としてのインドネシアの文化政策と伝統発展の方向性との関わり、保存と発展が推進される芸能ジャンルの国家による選別、などの問題に集中した。発表者の中心的な関心が芸能の伝統的な伝承法と新しい教育機関による教授法との違いにあったのに対して、質問者の関心は主に「伝統の変容」そのものに向けられたという点でやや関心のズレが感じられた。と同時に、後者の領域は発表者にとってこれからの研究課題のように思われた。

ヒューズ氏の発表テーマは、現在アメリカの民族音楽学界でシンボリズム研究の一領域として大きな関心を呼んでいるものである。発表者は「唱歌」に用いられる母音変化と音楽における音高変化との対応関係を通文化的にかなりの説得力をもって示したが、質問者(塚田、木村)からはこの対応関係は発表者がというような「自然性」の問題としてではなく、各社会によって異なる「文化的傾向」の問題として捉えるべきではないかとの疑義(これには発表者も同意した)や、この「唱歌」の問題を音色変化などの側面を無視して、単に音高変化の問題としてのみ捉えることへの疑義が提出された。それに対する発表者の返答は、残念ながら時間不足のため、自身の意を充分に尽くせない形で終了した観があった。

(塚田健一)

#### 会員異動(名簿記載事項の訂正・変更・追加)

(2000年8月~11月、訂正箇所は下線部)



住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡  
ください。(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用  
はがき、またはファクス、E-mail 等でも結構です)  
改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添  
えください。(複数表記される場合、どちらを主な表  
記にするのか等)  
事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等  
がある場合には、明記してください。

#### 図書・資料等の受贈

(2000 年 8 月~11 月、到着順)

は寄贈者(発行者と同一の場合は省略)

- 『MLAJ Newsletter』記事総覧  
 『MLAJ Newsletter』vol.21 No.2 音楽図書館協議会  
 『楽道』8,9,10,11月号  
 『中島雅楽之都先生略伝(九)』吉田倫子著 正派邦楽会  
 『白い国の詩』8,9,10,11月号 東北電力(株)地域交流部  
 『月刊みんぱく』8,9,10,11月号 国立民族学博物館  
 『ぎふ民俗音楽』第50号 岐阜県民俗音楽学会  
 『日本音楽学会会報』第50号  
 『音楽学』第46巻1号 日本音楽学会  
 『同朋大学佛教文化研究所紀要』第19号  
 『同朋大学佛教文化研究所報』第13号 同朋大学佛教文化研究所  
 『地域研ニュース』No.11 国立民族学博物館地域研究企画交流センター  
 『浜松市楽器博物館だより』No.21 浜松市楽器博物館  
 『江戸時代の琴土物語』岸邊成雄著 有隣堂印刷  
 『民俗芸能研究』第30号 民俗芸能学会  
 『アイヌ民族文化研究センターだより』No.13  
 『ボン カンピソシ』6(ウエネウサラ 口頭文芸) 北海道立アイヌ民族文化研究センター  
 『「作曲家」宮城道雄』千葉潤之介著 音楽之友社  
 『尺八古典本曲の研究』月溪恒子著 出版芸術社 大阪芸術大学芸術研究所  
 『癒しのうた』マリナ・ローズマン著 山田陽一／井本美穂共訳 昭和堂  
 『邦楽ディスク・ガイド』星川京児／田中隆文編 音楽之友社  
 『長唄維綴』稀音家義丸 新潮社  
 『猿田彦大神フォーラム年報 あらはれ』第3号 猿田彦大神フォーラム  
 『アジアセンターニュース』No.16 国際交流基金アジアセンター
- 『うたと日本人』谷川健一著、講談社、¥680(講談社現代新書)  
 『越前幸若舞』竹内輝雄著、文芸社、¥1,100  
 『江戸以前薩摩琵琶歌』島津正著、ペリかん社、¥4,200  
 『沖縄の三絃文化』名渡山兼一著、琉球音楽協会  
 『沖縄は歌の島』藤田正著、晶文社、¥2,400  
 『沖縄民俗文化論 祭祀・信仰・御獄』湧上元雄著、榕樹書林  
 『奥浄瑠璃集成 1』福田晃編、三弥井書店、¥8,500(伝承文学資料集成10)  
 『音の民俗学 越後と佐渡の祭りを聴く』伊野義博著、高志書院、¥1,800  
 『おもしろ日本音楽史』釣谷真弓著、東京堂出版、¥2,000  
 『角兵衛獅子』小湊米吉著、高志書院、¥2,500  
 『歌舞伎台帳集成 第33巻』歌舞伎台帳研究会編、勉誠出版、¥17,000  
 『歌舞伎台帳集成 第39巻』歌舞伎台帳研究会編、勉誠社、¥15,000  
 『韓国エンターテイメント三昧』田代親世著、芳賀書店、¥2,000  
 『関東お祭り紀行』重森洋志著、無明舎出版、¥1,600(んだんだボックス)  
 『雅楽』東儀秀樹著、集英社、¥700(集英社新書0065)  
 『祈願・祭祀習俗の文化史』奥野義雄著、岩田書院、¥8,400  
 『狂言じゃ、狂言じゃ!』茂山千之丞著、晶文社、¥1,800  
 『キリシタンと西洋音楽』横田庄一郎著、朔北社、¥2,400  
 『近世の都市と祭祀』高牧実著、吉川弘文館、¥10,000  
 『軍記語りと芸能』山下宏明編、汲古書院、¥8,000  
 『芸能・文化の世界』横田冬彦著、吉川弘文館、¥2,900(シリーズ近世の身分的周縁2)  
 『心に響く童謡・唱歌 世代をつなぐメッセージ』佐野靖著、東洋館出版社、¥2,500  
 『子ども舞台芸術ガイド2001』同編集委員会編、芸団協出版部、¥2,000  
 『「作曲家」宮城道雄』千葉潤之介著、音楽之友社、¥2,100  
 『尺八演奏論』山本邦山著、出版芸術社、¥2,400  
 『尺八古典本曲の研究』月溪恒子著、出版芸術社、¥6,000  
 『高橋竹山に聴く 津軽から世界へ』佐藤貞樹著、集英社、¥660(集英社新書0046)  
 『多文化子どもの歌集』多文化共生センター編、明石書店、¥800  
 『魂の音色 評伝高橋竹山』松林拓司著、東奥日報社、¥2,600  
 『近浄瑠璃の研究』小山一成著、双文社出版、¥3,800  
 『中世上演芸術 東と西』多賀敬二著、文芸社、¥1,600

## 新刊書籍(書名五十音順)

- 『アイヌ絵を聴く 変容の民族音楽誌』谷本一之著、北海道大学図書刊行会、¥16,000  
 『秋田の祭りを訪ねて』秋田市立赤れんが郷土館編、秋田市立赤れんが郷土館  
 『生月島のかくれキリシタン』生月町博物館・島の館  
 『老部のゴショウー通り』生月町博物館・島の館(生月島のオラシヨ)  
 『歌・踊り・祈りのアジア』星野紘編著、勉誠出版、¥7,000  
 『歌三線の世界 古典の魂』勝連繁雄著、ゆい出版、¥2,000

- 『天台声明 天納傳中著作集』天納傳中著、法蔵館、¥13,000
- 『長唄雄綴』稀音家義丸著、新潮社
- 『日本古典音楽探究』蒲生郷昭著、出版芸術社、¥10,000
- 『「日本の音風景 100 選」不動山の巨石をたずねて』橋本市郷土資料館・橋本市文化スポーツ振興社編、橋本市郷土資料館(てくころ文庫 7)
- 『能の多人数合唱(クロス)』藤田隆則著、ひつじ書房、¥12,000 (ひつじ研究叢書芸能編 2)
- 『はじめての三線』漆畑文彦著、晩声社、¥2,000
- 『バリ島 芸能の島の真実!』トラベルジャーナル、¥1,800
- 『舞台芸術の現在』渡辺守章著、放送大学教育振興会、¥2,600 (放送大学教材)
- 『舞踊手帖』古井戸秀夫著、新書館、¥2,200
- 『邦楽ディスク・ガイド』星川京児・田中隆文編、音楽之友社、¥1,800
- 『炎の伝承「北上・みちのく芸能まつり」の軌跡』北上・みちのく芸能まつり実行委員会
- 『美濃の能』曾我孝司著、岐阜新聞社、¥1,238
- 『都錦穂琵琶一筋』増子穂稜著、錦穂会
- 『山田のオラショ一座』生月町博物館・島の館(生月島のオラショ)
- 『山梨県の祭り・行事 山梨県祭り・行事調査報告書』同調査委員会編、山梨県教育委員会
- 『ユダヤ音楽の旅』水野信男著、ミルトス、¥2,800
- 『謡曲の楽しみ 少し上手に謡う法』謡曲普及会
- 『謡曲物語』和田万吉編、白竜社、¥9,800
- 『ようこそ能の世界へ』観世鏡之丞著、暮しの手帖社、¥2,285
- 『琉球横笛再考』玉木繁編著、那覇出版社、¥2,500

会報編集委員会

理事・加藤富美子、野川美穂子

参事・太田暁子、小塩さとみ、北岡朱実、竹内有一、  
福田千絵、前島美保、前原恵美、増野亜子、松村智郁子、  
三上康子

## 新発売視聴覚資料

- 『アイヌのうた』ビクター VICG-60400、¥1,995
- 『菊原光治歌の世界』日本コロムビア COCJ-31032-3、  
¥5,250

## 編集後記

本号より、会報編集委員会が新たなメンバーとなりました。引き続き、読みやすい紙面を工夫して参りますので、ご意見などありましたら、お寄せください。

号末に、総会議事録と添付資料を掲載いたします。

次号は、4 月理事会における議決事項および大会予告などを中心に、5 月 10 日頃に発行いたします。

第 31 回通常総会議事録(抄)・添付書類

1. 日時 2000 年 10 月 8 日(日)14:35~16:00
2. 場所 金沢市文化ホール大会議室
3. 出席者 286 名(委任状出席 244 名を含む)  
[備考]正会員 730 名, 定足数 245 名。
4. 議事事項と審議の経過及び結果  
定款第 25 条により久保田敏子会長が議長となり、定足数を確認の上開会を宣言し定款施行細則第 17 条により副議長の選出を議場に要請したところ、月溪恒子・久万田晋の両氏が選出されて副議長となり、以下の議事を開始した。

第 1 号議案 役員改選の件

2000 年度選挙管理委員会蒲生郷昭委員長が「役員選出資料」(添付書類 1)を朗読、重複当選等に関して補足説明し、議長がこれらの承認を議場にはかったところ、満場一致で可決承認された。

第 2 号議案 1999 年度事業報告の件

樋口昭理事が「1999 年度事業報告書」(添付書類 2)を朗読説明し、議長がこれらの承認を議場にはかったところ、満場一致で可決承認された。

第 3 号議案 1999 年度収支決算の件

加藤富美子理事が「1999 年度収支計算書」「第 50 回大会特別会計収支計算書」(添付書類 3)を朗読説明し、議長がこれらの承認を議場にはかったところ、満場一致で可決承認された。

第 4 号議案 2000 年 9 月 31 日現在貸借対照表、財産目録の件

加藤富美子理事が「貸借対照表」「財産目録」および「正味財産増減計算書」(添付書類 4)を朗読説明し、議長がこれらの承認を議場にはかったところ、満場一致で可決承認された。

第 5 号議案 2000 年 8 月 31 日現在会員異動の件

樋口昭理事が「会員異動状況(1999.9.1~2000.8.31)」(添付書類 5)を朗読説明し、議長がこれらの承認を議場にはかったところ、満場一致で可決承認された。さらに山口修監事が「監査報告書」(添付書類 8)を朗読した。

第 6 号議案 2000 年度事業計画の件

樋口昭理事が「2000 年度事業計画」(添付書類 6)を朗読説明し、議長がこれらの承認を議場にはかったところ、満場

一致で可決承認された。

第 7 号議案 2000 年度収支予算の件

加藤富美子理事が「2000 年度収支予算」(添付書類 7)を朗読説明し、議長がこれらの承認を議場にはかったところ、満場一致で可決承認された。

第 8 号議案 その他

議長が議場に対し発議を促したが、特に出されなかった。

(以下、添付書類)

[添付書類 1]役員選出資料

1. 平成 12 年度(2000 年度)役員選挙結果

- (1) 有権者数(2000 年 8 月 7 日現在)  
713 名(内海外在住者 38 名)
- (2) 被選挙権停止者数 6 名
- (3) 被選挙権休止者数 6 名
- (4) 投票締切日 9 月 2 日(土)
- (5) 開票日 9 月 4 日(月)
- (6) 投票者数 135 名(投票率 18.9%)
- (7) 開票結果

ア. 監事 総票数 270 票

無効票数 5 票 有効票数 265 票

(うち白票 38 通)

[順位]

- |   |       |      |
|---|-------|------|
| 1 | 山口 修  | 32 票 |
| 2 | 徳丸 吉彦 | 24 票 |
| 3 | 柘植 元一 | 14 票 |
| 4 | 小林 貴  | 13 票 |
| 5 | 小柴はるみ | 8 票  |
| 6 | 柿木 吾郎 | 6 票  |
| 6 | 月溪 恒子 | 6 票  |
| 8 | 谷本 一之 | 5 票  |
| 8 | 藤井 知昭 | 5 票  |

(4 票以下省略)

イ. 理事 総票数 1080 票

無効票数 13 票 有効票数 1067 票

(うち白票 73 通)

[順位]

- |   |       |      |
|---|-------|------|
| 1 | 柘植 元一 | 40 票 |
| 1 | 徳丸 吉彦 | 40 票 |
| 3 | 加藤富美子 | 38 票 |
| 3 | 薦田 治子 | 38 票 |
| 3 | 櫻井 哲男 | 38 票 |

6	茂手木潔子	28票
7	月溪 恒子	26票
8	塚田 健一	25票
8	塚原 康子	25票
10	野川美穂子	23票
11	蒲生美津子	22票
11	山口 修	22票
13	大谷紀美子	21票
13	草野 妙子	21票
13	小柴はるみ	21票
16	金城 厚	20票
16	久万田 晋	20票
18	植村 幸生	19票
19	高桑いづみ	18票
20	井野辺 潔	13票
20	龍村あやこ	13票
20	飯島 一彦	13票

(12票以下省略)

## 2. 選考結果

理事・監事の選出については、定款施行細則第8条から第14条までの各条に準拠し、選挙管理委員会の定める選出要項に基づいて行われた。定款施行細則第12条にさだめるところにより、徳丸吉彦が監事として選ばれた者と認めた。そのため蒲生美津子と山口修の順位を決定する必要が生じ、選挙管理委員会において抽選して蒲生美津子を11位、山口修を12位と決定した。その結果、理事については蒲生美津子が繰り上げ当選となった。

## 3. 役員選任原案

(監事2名)

山口 修 徳丸 吉彦

(理事15名)

植村 幸生 塚原 康子 尾高 暁子  
 月溪 恒子 加藤 富美子 柘植 元一  
 蒲生 美津子 寺田 吉孝 久万田 晋  
 永原 恵三 薦田 治子 野川 美穂子  
 櫻井 哲男 茂手木 潔子 塚田 健一

平成12年度(2000年度)選挙管理委員会

蒲生 郷昭(委員長)、副委員長 尾高 暁子、  
 太田 暁子、田中 多佳子、松村 智郁子

[添付書類 2]

平成11年度(1999年度)事業報告

(自平成11年9月1日 至平成12年8月31日)

(1999年) (2000年)

## 1. 事業の状況

### (1) 研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1)公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

・日時 1999年10月16日

・会場 東京学芸大学芸術館

・課題 「アジア大太平洋地域の音楽の過去・現在・未来-

研究者の役割再

考」

「アジアの伝統と関わる創作実践から」

(2)研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

・日時 1999年10月17日

・会場 東京学芸大学音楽学科・生活科学研究棟

・発表件数 10件

(3)次年度大会の準備

・日時 2000年10月7日-8日

・会場 金沢市文化ホール

・備考 日本歌謡学会と合同

(4)定例研究会

本部(定款施行細則第3条3)

・回数 8回(第426回-第433回、11・12・2・3・

4・5・6・7月)

・会場 上野学園日本音楽資料室、お茶の水女子大学、

東京藝術大学、その他

・内容 研究発表、研究報告、講演、自由討論、卒業論文・

修士論文発表

・備考 12月・5月の定例研究会は、日本音楽学会関東

支部との合同

関西支部(支部規約第2条)

・回数 5回(第195回-第199回、9・11・2・4・

6月)

・会場 国立民族学博物館、東本願寺御影堂、大谷婦人会

館その他

・内容 研究発表、シンポジウム、講演、見学、卒業論文

発表、その他

沖縄支部(支部規約第2条)

・回数 3回(第27-29回、12・6・7月)

・会場 沖縄県立芸術大学

・内容 調査報告、研究発表、講演、卒業論文発表

### (2) 学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(3)機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款第5条2)

第65号の編集・刊行

・内容 会員の論文、研究ノート、調査報告、研究動向、

通信、書評・視聴覚資料評・書籍紹介、大会・研究会記

録、田辺賞記録

(6)会報の刊行

- 『東洋音楽学会会報』 (「2.庶務の概要」「3.役員会等に関する事項」は省略)
- ・第 47 号(9月10日)、第 48 号(1月10日)、第 49 号 (5月10日) [添付書類 6]
- ・内容 会員への諸通知、理事会、総会記録、大会開催案内、大会レポート、新刊図書、視聴覚資料紹介、会員消息 (平成 12 年度(2000 年度)事業計画 (自平成 12 年 9 月 1 日 至平成 13 年 8 月 31 日) (2000 年) (2001 年))
- 『支部だより』 (1) 研究発表会および学術講演会の開催(定款第 5 条 1)
- ・第 36 号(10月28日)、第 37 号(3月1日)、第 38 号(7月25日) (1) 公開講演会の実施(定款施行細則第 3 条 1)
- ・内容 定例研究会案内、定例研究会記録、研究会情報、その他
- 『沖縄支部通信』
- ・第 25 号(6月1日) [日時 2000 年 10 月 7 日]
- ・内容 定例研究会案内、定例研究会発表要旨、質疑応答記録 [会場 金沢市文化ホール]
- (3) 関連学協会との連絡および協力(定款第 5 条 3) [課題 「『雪』のわらべ唄-白山麓から能登半島へ」 「歌謡劇の伝承」]
- (1) 日本学術会議への協力 [備考 日本歌謡学会と合同]
- 会員山口修氏を芸術学研究連絡委員会委員として派遣 (2) 研究発表大会の実施(定款施行細則第 3 条 2)
- (8) エスコ国際音楽評議会(I.M.C.)日本国内委員会への参加 [日時 2000 年 10 月 8 日]
- 会員柘植元一氏を理事として派遣 [会場 金沢市文化ホール]
- (9) 音楽文献目録委員会への参加 [発表件数 9 件]
- 会員新井弘順(任期 2000.3.31 まで)、梅田英春、高桑いづみ(以上 2 名再任)、蒲生郷昭(2000.4.1 から)の各氏を委員として派遣 [備考 日本歌謡学会と合同]
- (1) 国際伝統音楽学会(ICTM)への協力 (3) 次年度大会の準備
- 日本国内委員会として加盟 [日時 2001 年 11 月 24 日(土)-25 日(日)]
- (4) 研究の奨励および研究業績の表彰(定款第 5 条 4) [会場 沖縄県立芸術大学]
- (1) 田辺尚雄賞 [4] 定例研究会
- 第 16 回田辺尚雄賞の授賞 [本部(定款施行細則第 3 条 3)]
- ・受賞者 新井弘順氏、スティーブン・G・ネルソン氏、近藤静乃氏、内田敦氏 [回数 8 回(10・12・2・3・4・5・6・7 月)]
- ・授賞対象 新義真言声明集成 楽譜編 [会場 上野学園日本音楽資料室、東京芸術大学音楽学部、その他]
- 第 17 回田辺尚雄賞の選考と発表 [内容 研究発表、調査報告、講演、卒業論文、修士論文発表、表、その他]
- ・受賞者 岸辺成雄 [備考 12 月・5 月の定例研究会は、日本音楽学会関東支部との合同]
- ・授賞対象 「江戸時代の琴土物語」『楽道』第 618-698 号、正派邦楽会、1993 年 4 月-1999 年 12 月発行 [関西支部(支部規約第 2 条)]
- (5) 研究および調査(定款第 5 条 5) [回数 5 回(9・10・2・4・6 月)]
- (1) 国内または国外における学術調査および研究 [会場 国立民族学博物館、上鴨川住吉神社その他]
- とくになし [内容 研究発表、見学会、その他]
- (6) その他目的を達成するために必要な事業 [沖縄支部(支部規約第 2 条)]
- (定款第 5 条 6) [回数 3 回(11・2・6 月)]
- 東洋音楽学会ホームページを通して行う学会情報の提供 [会場 沖縄県立芸術大学]
- [内容 研究発表、講演、卒業論文、修士論文発表、調査報告、その他]
- (2) 学会誌および学術図書の刊行(定款第 5 条 2)
- (5) 機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款第 5 条 2)
- 第 66 号の編集・刊行 [第 66 号の編集・刊行]
- [内容 会員の論文、研究ノート、調査報告、研究動向、通信、書評、視聴覚資料評、書籍紹介、大会、研究会記録、田辺賞記録]

(6) 会報の刊行

『東洋音楽学会会報』年 3 回 (9 月、1 月、5 月)

内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、田辺賞発表

図書・視聴覚資料紹介、会員消息

『支部だより』年 3 回 (12 月、4 月、9 月)

内容 関西支部定例研究会の開催案内、定例研究会記録、研究活動ニュース、支部会員への諸通知、その他

『沖縄支部通信』年 3 回

内容 例会案内、例会発表要旨と質疑応答記録、その他

(3) 関連学協会との連絡および協力 (定款第 5 条 3)

(7) 日本学術会議への協力

会員山口 修氏を芸術学研究連絡委員会委員として派遣

(8) UNESCO 国際音楽評議会 (IMC) 日本国内委員会への参加

会員柘植元一氏を理事として派遣

(9) 音楽文献目録委員会への参加

会員高桑いづみ氏、梅田英春氏 (以上 2 名 2001.3.31.まで)、蒲生郷昭氏を委員として派遣

(10) 国際伝統音楽学会 (ICTM) への協力

日本国内委員会として加盟

(4) 研究の奨励および研究業績の表彰 (定款第 5 条 4)

(1) 田辺尚雄賞

第 17 回田辺尚雄賞の授賞

日時 2000 年 10 月 7 日

受賞者および授賞対象 岸辺成雄氏

『江戸時代の琴士物語』『楽道』第 618-698 号、正派邦楽会、1993 年 4 月-1999 年 12 月 発行

第 18 回田辺尚雄賞の選考と発表

(2001 年 4 月予定)

(5) 研究および調査

(1) 国内または国外における学術調査および研究

とくになし

(6) その他目的を達成するために必要な事業

(定款第 5 条 6)

東洋音楽学会ホームページを通して行う学会情報の提供

[添付書類 8]

社団法人東洋音楽学会 会長久保田敏子殿

監査報告書

社団法人東洋音楽学会の平成 11 年度財産の状況ならびに、業務執行の状況を監査しましたが、健全に運営されていることを認めます。

平成 12 年 9 月 11 日

監事 竹内道敬

監事 山口 修